

## 談話におけるノダ「非使用文」の条件と機能

### Statements in the Absence of Sentence Nominalization Marker, *Noda* Condition of Use and Discourse Functions

京野 千穂

#### 要旨

ノダは使用条件より非使用条件の方が習得が難しいことが報告されているが(趙 2008)、非使用条件に焦点を絞った研究がない。本稿ではノダの使用文と非使用文を比較して、非使用文の条件および談話機能を明らかにする。その結果、ノダ非使用文は、ノダ機能の表出を回避するために用いられるが、ノダ非使用文に固有の機能もあることが分かった。ノダ非使用文は、聞き手の想定に関与せず、話し手側の命題の正否判断を特に明確にしたい場合使用されることが分かった。また、ノダ使用文が、聞き手に物事の全体像の把握を促す働きがあるのに対し、ノダ非使用文は、中核的命題を提示する機能がある。ノダ非使用文が羅列文的な印象を与えるのは、中核的命題を表すことと関連があることを示す。

#### キーワード

日本語 日本文化 ノダ非使用文 ノダ非使用文の談話機能 話者側の正否判断明示  
関連周辺情報と中核的命題 羅列文

#### 1 はじめに

ノダは、これまで多くの研究者によってその本質や機能が明らかにされてきた一方、ノダが使用されない、あるいはその使用が不適切である理由について積極的に研究したものがない。現状として学習者はノダを多用するか全く使用しない傾向にあり、また、超級話者においてはノダカラ(ンデスカラ)の誤用が残るという報告もある(蓮沼 2006)。趙(2008)は、中上級の学習者にとって、ノダの使用条件よりも非使用条件の理解度のほうが低いことを明らかに示し、日本語教育の立場からノダの非使用条件に焦点を当てる必要性を指摘している。さらに、市川(2010:590-591)は日本語教育における誤用修正という観点から、「のだ・んだ」は、学習者にとって使いこなすのが難しい項目であり、使いすぎると感情過多の発話・文章になるので注意が必要であるとしている。このような背景から、本稿ではノダ非使用文に焦点を当てることが重要と考え、考察を行う。

## 2 先行研究

### 2-1 ノダの定説

ノダの中心的な機能に関しては今までに様々な研究成果があるが、特に現在の日本語教育においては、「説明」(寺村 1984)、「関連づけ」(野田 1997) 及び、「既定性・背後の事情・実情」(田野村 1990) 説を基にしていると言えるであろう。ノダ研究の歴史は決して短いものではなく様々な研究が行われてきた。しかし、依然として、名嶋 (2007)、藤城 (2007)、趙 (2008)、市川 (2010) からも指摘しているように、日本語教育の場においては非常に扱いにくい文法項目の一つであることに変わりがない。名嶋 (2007:307) はノダの意味論的意味を学習者に理解させることは難しく、また、様々な語用論的意味を教えることも非常に困難であることを指摘し、日本語教育の場においてノダの効果的な教授方法が必要だとしている。

### 2-2 ノダの新説

このような問題が未だに存在することから、新たな角度でノダを捉え直しているのが菊池 (2000)、石黒 (2003)、名嶋 (2007)、藤城 (2007) である。菊池 (2000) は「共有されている知識・状況に関連する、未共有の付加的な情報を補う」とし、石黒 (2003) は、「既存の不十分な情報が発話時に十分になることを示す」、藤城 (2007) は「ノダは<話者自身の事実認識>と、<それとは異なった事実認識や現実>との間にあるギャップを話者が意識していることを明示する」としている。また、名嶋 (2007) は、「ある命題を聞き手側からみた解釈として、意図的に、かつ意図明示的に、聞き手に対して提示する」機能を持つとしている。つまり、聞き手に解釈されるべき内容を話者から示すということと言い換えられるであろう。これらの新しいノダ説に共通しているのは、「聞き手に不足している、十分認識されていない情報を補う」機能がノダにあるということと言える。しかし、依然として一つのノダ説で全てのノダを説明することができない。例えば、名嶋・藤城の説は下の (1) (2) を説明できるが、(3) を説明することができず、石黒・菊池説は (3) を説明できても (1) (2) ができない。(1) は KY コーパス<sup>1</sup>に見られた例である。面接者 Q は、最初に話者 A から個人的な情報を収集している。(1) において、面接者 Q は、話者 A の子どもについて話題が展開できるかを確認するために、まず、話者 A に子どもがいるかどうかを確認している。しかし、その面接者の予想に反して話者は子どもがおらず、「子どもがいない」という事実にもダを使用している。これは、藤城の「認識のギャップの明示」で説明できる。話者は面接者との認識のギャップをノダで示したと捉えることができる。仮に、面接者の見通しに反しない、つまり「子供がいる」(2) の場合、ノダを使用しないほうが自然であることから、聞き手と話者の認識に差がない場合は使われておらず、藤城説で説明ができる。また、名嶋説では、「先行発話や思考の解釈として」聞き手側

が取るべき解釈を話者側から意図明示的に示すのであり、面接者の想定と話者の実態が異なる(1)の場合は、「子供がいない」という正しい解釈をノダ使用によって聞き手に明示し、(2)は面接者の想定と実態が同じであるため、新しい解釈を明示する必要がなくなり、ノダ非使用になったと説明できる。

(1) Q: お子さんは?失礼ですけど。

A: あっ、子どもはいないんです。はい

(KY コーパス、国際基督教大学、I.T.、(F))<sup>2</sup>

(2) Q: お子さんは?失礼ですけど。

A: あっ、おります。はい。

しかし、(3)は、聞き手の想定がゼロの場合、つまり B のセーターについて何も知らない状態で発せられたものである。聞き手 A の想定がゼロであることから、藤城の「<話者自身の事実認識>と、<それとは異なった事実認識や現実>との間にあるギャップを話者が意識していることを明示する」とまでは言い難い。(3)の場合は、菊池の「共有されている知識・状況(=セーター)に関連する、未共有の付加的な情報(=母が編んだ)を補う」のほうが適切な説明である。また、名嶋説は、「先行発話や思考の解釈として」聞き手側から見た解釈として情報を明示するのであるから、先行発話の「すてきなセーター」に関し、聞き手 A から見た解釈として「母が編んだ」ことを提示していることになる。しかし、(3)においては、「聞き手から見た解釈」として提示しているというより、菊池の「未共有の付加的な情報」の方が適切であると言える。

(3) A: すてきなセーターですね。

B: 母が編んだんです。

(坂野 2003:237)

このように、一つのノダ説で全てを説明することは難しいが、上記四つの新しいノダ説を用いれば、様々な「ノダ」を説明することは可能である。しかし、ノダ「非使用文」を上記ノダ説で説明することは、必ずしも可能ではない。例えば、例文(4)は、新しいノダ説が当てはまる場合であるが、実際の発話においては、ノダ非使用文が選択されている。つまり、(4)は聞き手の解釈「大変でいらっしやる」に対し、話者が「楽しい」と答えており、これは、「相手の認識とのギャップを明示する」情報であり、「未共有の付加的な」情報でもあり、「不十分を十分にする情報」でもあり、また「聞き手側から見た解釈を話者から意図明示的に提示する」場合であるとも解釈できる。よって、(4) A'で示したように、ノダの使用が適切と考えられるのだが、実際の話者は、Aで示すようにノダ非使用文で答えている<sup>3</sup>。ここで話者がノダ非使用文を選択したのは、単に上記ノダの機能を表出させないためか。例えば、「相手の認識とのギャップ」を表出せず、「聞き手から見た解釈として」理解してほしいという意図を明らかにさせないためか。あるいは、「未共有の付加的な情報」、「不十分を十分にする情報」ではない情報として伝達しているのか。あるいは、ノ

ダ非使用文には、固有の機能があり、それを提示している可能性もある。これらを明確にするためには、ノダの機能からノダ非使用文を見るのではなく、ノダ非使用文を中心に考察することが必要であると本稿では考える。従って、本稿においては、KY コーパスに見られたノダ非使用文を用い、談話内のノダ非使用文の使用条件および機能を明らかにしていく。

(4) Q: あ、ただそれだけですか？一週間だけ（仕事の休みが）。

A: いえ、あの一、後は、そうですね時に応じて。

Q: そうですかー。大変でいらっしゃるんですね。

A: あ、いえいえ、楽しいですよ。（KY コーパス、国際基督教大学、I.T.、(F)）

A: あ、いえいえ、楽しいんですよ。

### 2-3 ノダの談話内機能に注目した研究

新しいノダ説とは異なる観点で、特に「談話内」の機能に注目した研究に、Yoshimi (2001) がある。Yoshimi は、説明や語り等の談話内のノダを、談話マーカ―として捉えている。ノダが、長い談話の構成を整え、話の方向を聞き手に示すもので、談話に一貫性を与え聞き手を引き込む作用があるとし、そのような機能を持つものを談話マーカ―と定義している。Yoshimi (2001) の研究は、第二言語教育の立場から行われており、ノダを「談話マーカ―」として明示的に教授した場合、学習者の会話能力にどのような変化があるかを明らかにしたものである。従って、談話マーカ―としてのノダの詳細な考察および分析はなされていない。しかしながら、長い談話のノダ機能を今までにない視点で捉えていることから、以下に Yoshimi (2001:230) のノダ機能を引用する。

*n desu* – provides the “glue” that holds a story together and draws the listener into the story.  
(Without *n desu* a story may sound like a list of facts)

つまり、ノダは糊のように、ひとつひとつの文を接着するような働きがあり、聞き手を話に引き込むものだとしている。また、ノダを使わないと、一連の話としてではなく、事実の羅列に聞こえるとしている<sup>4</sup>。本稿は、何故、ノダ非使用文が、文の羅列およびまとまりを構築しないのかについても明らかにする。よって、語りや説明も考察の対象に含め、ノダ非使用文の談話内機能を考察する。以下に本稿の目的をまとめる。

#### 本稿の目的

ノダ非使用文の使用条件と機能を考察することによって、以下の点を明らかにする。

- 1) ノダ非使用文の機能は、ノダの機能の表出を回避するのみか、あるいは、ノダ非使用文に固有の機能があるか
- 2) ノダ非使用文が、羅列的な印象を与え、まとまりを構築しないのは何故か

### 3 KY コーパスに現れるノダ使用と非使用比較

#### 3-1 談話の中で「のだ」はどのくらい使われているか

Maynard (1996) が調査に使用した会話および対談においては、約 25% が「のだ」終止文であったとしている。本稿では KY コーパスの中から、母語話者の会話 50 名分のうち、国内で行われた 40 名分の談話を用いた。長さはそれぞれ 15 分程度の談話であるが、文字化されており、分析には文字化されたものを用いた<sup>5</sup>。それらの談話を分析した結果、文総数 9687 文のうち、文末および文中に現れたノダは 1743 個であった。文総数に対しノダ文は 20% にも及ばず、日本語話者の談話において、ノダが非使用である場合のほうが多いことがわかる。また個人差も大きい。KY コーパスは談話形式が決まっているが（注 1 を参照）、ノダの回数が最も少ない被験者で 21 回、最も多い被験者で 81 回であり、ノダ使用に個人差があることが分かる。また、1743 個のノダの内、641 個がインデスケレドモ／インデスケドで、406 個がインデスカ、160 個がインデスネ、102 個がインデスヨ（インデスヨネを含む）、そして 96 個がインデス終止文であった。談話に現れるノダは圧倒的にインデスケレドモ（インデスケド）及びインデスカであり、インデス終止文は少ないことが分かる。

#### 3-2 ノダ使用文とノダ非使用文の比較

##### 3-2-1 ノダ使用・非使用条件

この章では KY コーパスの母語話者の会話で確認された例を用い分析を行う。上の 3-1 で見られたように、ノダは様々な形で使用されているが、本稿ではそれらの形の中でノダ使用時とノダ非使用時の機能を比較し違いを考察する。

まず、インデスガ・インデスケレドモ・インデの例であるが、(5) で示すように、話者が直接答えを述べる前の前置き表現として使用されている。つまり、最初にポーランド語で話していたかどうかという質問があり、それに対し、話者は「英語を話せる人がかなりいた」ことをインデで表し、その後質問の答え「英語と（ポーランド語を話していた）」を示唆している。そして次の質問、ホームステイ先ではどうだったか（何語だったか）という質問に対して、「同じ年の子がいた」ことをインデスガで表し、その後「英語を喋れて」という形で質問に答えている。このように、談話の中でインデスケレドモは一定の型を示し、インデスケレドモで関連・周辺情報あるいは背景を述べてから、答えに導いていく形が目立つ。(6) の場合も同様である。聞き手は将来の方向について知りたいのであるが、話者はまず「はっきりと決まっていないこと」をインデスケレドモで提示し、後半で聞き手の質問に答えを出している。

(5) Q: じゃあ（ポーランドにホームステイをして）、それで（ポーランド語で）コミュニケーションしてきた、訳ですか？

A: あとはあの一、英語を喋れる方が、かなりいらっしゃったんで。その方達と英語と・・・。

Q: でもホームステイのさ、ホームステイ先ではどうですか？

A: ええと一、ホームステイ先のあのお子さんが、あの一、僕と、同じ年の、子が、何人かいたんですが、その子達は英語を喋れて。

(KY コーパス、国際基督教大学、N.F.、(M))

(6) Q: え一、専攻で勉強なさってから、じゃ将来は、どんな方向についてゆうふう<sup>に</sup>に考えてらっしゃいますか？

A: ええととそうですね一、今、特別に一これってゆうふうには決めてないんですけれども一、でもいちお一は、あの今これがやってみたいことなので、あの大学で、ともかく勉強して、でもし一できれば、えと一大学院のほうにすすんで、もう少し、あの一べん、研究を続けていけたらいいなと思っています。

(KY コーパス、国際基督教大学、K.N.、(M))

続いて、ンデスケレドモに対し、ノダ非使用のデスケレドモについて考察する。KY コーパスでは殆どがノダ使用のデスケレドモであって (402 個中 324 個、約 81%)、ノダ非使用のデスケレドモは少数であった。例えば「日曜日あたりが一番お中元のピークだったそうですけれども」、「いろんな解決策も試みられているみたいですから」、「今、夏暑い盛りですから」、「日本人は日本語を喋れるって言うのは当たり前」、「ハングリー精神というのはよく言われること」等であった。先行研究において、菊池 (2000)、石黒 (2003)、名嶋 (2007) および藤城 (2007) に共通しているのは、「聞き手が十分認識していないことを明示する (=認識させる)」という対人的態度であった。このことは、反対に、聞き手が認識しており、話者に認識させようという態度がない場合、ノダが使用されないということになる。確かに、KY コーパスで見られた例においては、「日曜日あたりが一番お中元のピーク」「今、夏暑い盛り」「日本人は日本語を喋れるって言うのは当たり前」「ハングリー精神とはよく言われることです」等、ケレドモの前にくる情報は一般的な内容であって、聞き手も認識しているであろう内容になっている。しかし、一方で、「あのオリンピックが始まるんですが、オリンピックなど、スポーツはお好きでいらっしゃいますか」等のように、聞き手が認識していると思われる情報であってもノダが使用されている場合が KY コーパスには見られるのである。

(7) Q: その一実際塾で勉強している子供たちは どうなんですか？それを楽しんでいる、苦痛ではないという、そんな話も聞いたことがあるんですけども。

A: ええ。それは一やっぱり、遊びたいでしょうね。ただ、だからこれもあの一クラスの、レベルによるんですけども、上の子っていうのはやっぱりあの一非常に、勉強することを楽しんでいるっていうか、その、勉強って言うの

は強いて勉めるって書きますけれども、それよりはむしろ、あのー我々が大学でやるような学問ですか、学んで問うこと、を喜んでやってるようなふしが見えますね。  
(KY コーパス、国際基督教大学、S.K.、(M))

A': ええ。それは一やっぱり、遊びたいでしょうね。ただ、だからこれもあの、クラスの、レベルによるんですけれども、上の子っていうのはやっぱりあのー非常に、勉強することを楽しんでいるっていうか、その、勉強って言うのは強いて勉めるって書くんですけれども、それよりはむしろ、我々が大学でやるような学問ですか、学んで問うこと、を喜んでやってるようなふしが見えますね

A'': ええ。それは一やっぱり、遊びたいでしょうね。ただ、だからこれもあの、クラスの、レベルによるんですけれども、上の子っていうのはやっぱりあのー非常に、勉強することを楽しんでいるっていうか、その、確かに、勉強っていうのは強いて勉めるって書くんですけれども、それよりはむしろ、我々が大学でやるような学問ですか、学んで問うことを喜んでやってるようなふしが見えますね。

例文(7)は、デスクレドモの前に来ている情報、「勉強というのは強いて勉めると書く」が、日本語話者である聞き手が認識している内容である。よって、ノダは使用されていないと説明することができる。しかし、この例文にノダを使用して、(7) A'のように「勉強というのは強いて勉めると書くデスクレドモ」としても、非文にはならない。その代り、二つの解釈が可能な文となる。先行研究が示す通り、ノダを使用すると、聞き手がその内容を知らないで説明しているという解釈も可能である。あるいは、「その情報が事実であることは認めるけれども」という前置きをしているような印象も与える。これは、(7) A''のように、デスクレドモの前に「確かに」を挿入してみると、より後者の意味が明確になる。「確かに、勉強というのは強いて勉めると書くデスクレドモ」とすると、「勉強は強いて勉めると書くこと」を、聞き手に今一度認知させる、再度把握を促しているという解釈が可能になる。その事実を事実として認めることを明示しているのがノダで、その上で後文の主張が展開されているという解釈が可能である。

ここまでをまとめると、二つのことが言える。第一に、聞き手がある情報を認識していると話者が判断した場合、ノダ非使用になり(例文(7) A)、認識していないと判断した場合はノダ使用になる。第二に、(7) A''の例文のように、聞き手が認識していると考えられる場合であっても、聞き手に再認識および再把握を促す意図がある場合にはノダ使用になるということだ。従って、ノダが非使用になるのは、聞き手が、ある情報を認識している場合で、しかも聞き手に再認識させる必要がないと判断された場合だと言える。

ここで、例文(4)に戻る。(4)は従来のノダ説では説明できない例として挙げたもの

だ。「楽しい」というのは、聞き手の想定内に存在しない情報であり、聞き手が認識していないことを述べるのであるからノダ使用になるはずであるが、実際には、「楽しいですよ」とノダ非使用になっている。ノダを使用しないことによって、話者は、聞き手が認識していないこと、想定外のことを知らせるという意図の表出を避け、命題の正否判断のみ伝達していると考えられる。仮にノダ使用文 A'のように返答すると、「大変でいらっしゃいますね」という聞き手の認識と話者の実態が異なることを意識させ、聞き手に正しい認識把握を促そう、調整しようという意図を感じさせる。従って、話者は、ノダ非使用を選択することにより、聞き手の「大変でいらっしゃいますね」という配慮をそのままに、楽しいか、楽しくないかという、正否判断のみをノダ非使用によって表したと分析する。

ここまでをまとめると、以下の通りになる。

#### ノダ非使用条件

ある情報が、聞き手の想定内にあり、聞き手が十分認識し、その情報の再認識を促す必要がない場合か（例文（7））、ある情報が聞き手の想定外であっても、その情報が聞き手の想定外であり認識してもらいたいという意図を表出しない場合に（例文（4））、ノダが非使用になる。

### 3-2-2 ノダ非使用文の機能

上記のノダ非使用条件をさらに検証するために、例文（8）（9）（10）を検証する。また、この項では、ノダ非使用がどのような機能を有しているかを考察し、その機能を明らかにする。

まず、（8）（9）は、質問者がノダ使用の質問文デスカを使い、回答者はノダ非使用文で答えている例である。このようなノカ質問、非ノダ回答型は、初級の教科書においても見られる。例文（8）はその一つで、社団法人国際日本語普及協会（2007:34）のワークブックに見られた問題である。学習者は質問と回答両方にノダを使う傾向にあり、何故、回答でノダ非使用かが理解されにくい。また、例文（9）は、非母語話者である医師と日本語母語話者によって、日本語で交わされた会話である。医師の「いたくないんですよ」が不自然であるが、不自然と感じさせる根拠とは何か。これらの詳細を考察する前に、KYコーパスの例（10）を検証したいと思う。

（8）A: ハワイのおみやげです。どうぞ。

B: いつハワイに行ったんですか。

A: せんしゅう行きました。

B: ハワイのどこに行ったんですか。

A: ハワイとうの コナです。

（9）患者（母語話者）：歯を白くしたんですが、痛くないんですか？



医師（非母語話者）：痛くないんですよ。

例文（10）では、被験者がンデスヨネを使って何かの（前に話されたことの）周辺事情と思われることを伝えている（「さぼってしまうんですよね」）。その事実を驚いた聞き手が「さぼっちゃうの」と聞き手に確認をせまり、それに対して話者は「さぼります」とノダ非使用文を使ってきっぱりと言い切っている。この例では、話者が最初に「さぼっちゃうんですよね」と聞き手に伝えているため、その段階で聞き手の想定の中には「さぼる」ことが入力された。「さぼっちゃうの？」で聞き手が話者に求めていることは、聞き手の想定が正しいかどうかをその場で話者に明確にしてもらうことである。よって、話者が当該命題の正否判断をその場で下すことが最も優先され、ノダ非使用によってその役割を果たしていると分析する。例文（7）A”において、聞き手が認識していることにノダが使用された場合、聞き手に再認識を促すということであった。ここでは、聞き手が既に想定していることについて、聞き手に再認知や再把握を促すよりも、話者自らが当該情報の正否判断を明確にその場で下すことが、文脈上最も優先的である（聞き手に求められている）と話者が判断した場合、ノダが非使用になることを示している。

(10) A: えーと、そうですね、朝ちょっと恥ずかしいんですけど、ほとんど午前中授業はさぼってしまうんですよね。

Q: え、さぼっちゃうの？

A: さぼります。 (KY コーパス、プリンストン大学、M.I.、(M))

先の例文（8）および（9）の考察に移る。（8）において、話者はノダ非使用で答えているが、同じ例文におき、「先週行ったんですよ」、「ハワイとうのコナなんです（コナに行ったんです）」とノダを使う方が適切である場合も考えられる。例えば、聞き手がその内容（時期が先週、場所がハワイのコナであること）を予測していないであろう、驚くであろうと話者が判断した場合、ノダ使用が適切になる。「聞き手の想定外のことを知らせる」という話者の意図がある場合にノダが使用されることを示している。（8）で、話者がノダを使用しなかったのは、聞き手の想定外かどうかにかかわらず、聞き手の質問に明確に答えを提示するということが最優先した結果であると分析する。ノダ非使用により、話者は、聞き手の想定外かどうかに関与せず、当該命題の答えを明示することだけに集中していると言える。

次に、例文（9）は、例文（10）と類似し、患者（聞き手）の想定内に「いたくない」が既に存在しているが、患者はその想定が正しいかどうかを話者（医師）に確認したいと思っている。ここで、話者に最も求められていることは、その当該命題、「いたくないか」の正否判断を明らかに下すことである。ノダを用いた「いたくないんですよ」という答えは、聞き手の想定「いたくない」を聞き手側に再認知・再把握をしてもらうという過程を伴うのに対し、「いたくありません」は話者が決断をその場で下して聞き手に明示するとい

う過程を伴う。前者と後者、どちらが説得力が強いのか、聞き手が納得して安心するかと言えば、後者の方である。聞き手（患者）の想定を聞き手自身（患者自身）が再認知するより、患者の想定に関わらず、医師である話者自らが責任を持って判断を下して聞き手に伝えることの方が、この場合、意思伝達上最も求められ適切であると分析する。よって、(9)ではノダ非使用の方が自然に聞こえるものとする。

例文(8)(9)(10)は、聞き手の想定に関係なく、話者はどう判断するかを明確にする場合であると言える。この結果から、ノダ非使用文には以下の機能があることを提唱する。

#### ノダ非使用文の談話機能

聞き手の想定および認識に関与しない、話者側の正否判断を聞き手に明示する

市川(2010:590-591)は、ノダを使いすぎると感情過多の発話・文章になるとしているが、それは、ノダ非使用文が、聞き手の想定や認識に関与しない話者側の判断として情報を提示するのに対し、ノダは、話者が聞き手の認識度を意識し、聞き手が想定外のことを認識させよう、正しい把握を促そう(導こう)という、意図を表出してしまうからだとも本稿では分析する。

### 3-3 ノダと非ノダ：全体把握のための関連周辺情報と中核情報

本稿の目的の一つは、ノダ非使用文が何故羅列的な印象を与え、ノダ使用文がまとまりを生むのかということである。よって、この節では、語りや説明など、ある程度の長さを持った談話を考察していく。

例文(11)のAは実際にKYコーパスに見られた会話であり、(11)のA'は、比較のために、ノダを抜いたものである。(11)の談話を(11)A'のように、「多かったですよね」「ほとんどかったですよね」とすると、あたかも聞き手がその情報を知っていて、その正否判断を一つ一つ聞き手に確認しているかのような印象を与えてしまう<sup>6</sup>。それとは対照的に、(11)Aのノダ使用文は、一つのまとまりのある談話として捉えられる。(11)のAを見ると、上の(5)および(6)のンデスケレドモの例文に見られたように、聞き手の質問に対し、話者がまず関連周辺情報をンデスヨネで示し、最後に「～と思います」の形で、質問に対する話者の答えを伝えるという型が見られる。(5)(6)と(11)の例に共通していることは、談話の中のノダは、ある中核を成す命題の、周辺の関連情報の把握を聞き手に促す役割があること、そして、ノダなし文は中核を成す陳述、聞き手が明確にとらえたい命題の正否を聞き手に提示するものであることだ。

(11) Q: まあ、あの一、どうですか、比べてみて(二つの大学を)。良さ悪さ。

A: はい。そうですね。あの、前にいた大学はものすごく人数が多かったんですよね。それで一、いわゆる、何百人も入るような教室で、やるような、授

業がほとんど、だったんですよね。ですからー、やはり、あの、国際基督教大学はものすごく少人数ですし、先生とのコミュニケーションの密度っていうのが全然、こう、あったんで、それは、ほんとに、あのよかったと思っています。  
(KY コーパス、国際基督教大学、T.S.、(F))

A: #はい。そうですね。あの、以前にいた大学はものすごく人数が多かったですよね。それでー、いわゆる、何百人もはいるような教室で、やるような、授業がほとんど、でしたよね。ですからー、やはり、あの、国際基督教大学はものすごく少人数ですし、先生とのコミュニケーションの密度っていうのが全然、こう、あったんで、それは、ほんとに、あのよかったと思っています。

ノダ非使用文がある命題の正否判断を明確にする中核情報を、ノダ使用がその中核情報の周辺関連情報を伝達するという本稿の主張をさらに検証するために、語りの中のノダ使用と非使用について考察したい。下の例文(12)は話者が最近読んだ本について説明したものである。ノダが四回使用されており、最終文はノダ非使用である。これらのノダ使用は全て、聞き手にその本の話の全体像を把握してもらうため、まず周辺関連情報を聞き手に提示していく。聞き手の把握を助けるため、聞き手が全体像をつかめるよう、パズルのピースを一つずつ埋めていくような作業をノダ使用によって行っていると考える。最終的にどのような話であったかが最後の文で語られるが、それは聞き手の質問に答える最終的な結論の部分であり、中核的情報であると言えるため、ノダが非使用になっていると説明ができる。

(12) ……あの一田辺聖子さんの えーとあの一歌子さんというおばあさん、78歳ぐらいのおばあさんのその、おばあさんのその老、老、なんて言うんでしょうかしら年とってからの青春みたいなもの、シリーズで書いている本がございましてそれが非常にこ気味良くて あ、ああいう風に年とろうというふうな感じなんですが。まあそれは、あのシリーズですからストーリーということではないんですが、その歌子さんは非常にあの苦勞して夫に先立たれて古いあの船場のあの一織物間屋を一手に女手一手に引き受けてあの一非常に没落した所からまた再興させて、で、あの自分ひとりで頑張ってきた人なんですね。でまーもちろんお金も持ってますし、えー息子達も全部独立させて今が自分の一番の青春だということで息子達にも一切文句を言わせない、自分の為にこれからは生きるんだという 70過ぎてからの、か、約10年ぐらいのシリーズなんです。それが非常にあのおもしろくてうなずけることがいっぱいあります。

(KY コーパス、国際基督教大学、Y.S.、(F))

このように、ノダは長い語りや説明の中で、聞き手に全体像を把握してもらいたい時、

パズルのピースを一つずつ埋めるように、聞き手の全体像の把握を助ける情報を提示していく。それは、大きな絵を構成する一つ一つの情報であることを示すかのようである。2-3で示したように、Yoshimi (2001) が語りや説明の中のノダを、文と文を接着する糊のように、話をまとめるものとし、また、ノダ非使用文を事実の羅列だとした。しかし、ノダ使用文およびノダ非使用文が何故そのような印象を与えるかについては触れられていない。上で考察したことから、本稿では、その理由として、ノダが聞き手に全体像の把握を促し関連周辺情報を提示するという機能を持つために、結果的に、前後に関連性が生まれ、文と文を繋いでいるという印象を与えるものとする。また、ノダ非使用文は、中核情報を提示し、何かに関連した情報を提示するのではなく、その情報が最も伝えたいものであり、完結するものであるため、結果的に一つひとつ独立した、羅列文という印象を与えると本稿では分析する。

上記の説、ノダ使用文が全体像把握のための関連周辺情報を、そしてノダ非使用文が中核的情報を提示することを、下記の例文を用いてさらに検証する。(13) (14) の例において、何故 (13) ではノダが使用され (14) では使用されないのかを説明することが従来のノダ説または新しいノダ説を使っても把握しにくい。どちらも、A が質問することによって、「Aに不足しているあるいは十分認識していない情報を明示する」ことを B に求めるからである。しかし、本稿の「全体把握と中核情報説」で捉えると、これらの例文のノダ使用と非使用を新しい角度から捉え直すことができる。(13) は、パーティーで交わされる会話であって、隣の留学生のことを知りたい、どんな人か把握したい、つまり、その人の全体像を把握したいから発せられた質問である。聞き手が興味を持ち、その人物について関連する周辺的な情報を得たいという意図があるため、ノダが使用されたと考える。言ってみれば、大きな絵の中で欠けたパズルのピースを一つずつ埋めて全体を把握するような作業をノダ使用によって行っていると考える。それに対して、(14) は事務的な質問であり、その留学生についてどんな人か、その全体像を知りたいから発せられた質問ではなく、その一つの命題についての正確な情報が必要なものであり、その人物についてその情報だけを満たせばよいから、ノダは使用されない。これと同じような例として、医師が患者に対して、「どうしましたか」とノダが非使用であるのも、その人物自身に興味を持ち人物像を把握したいから聞くのではなく、その患者が現在持っている症状という情報だけを求めているから、ノダは使用されないと本稿では分析する。また、同じ質問を医師ではなく友達が聞く場合、「どうしましたか」ではなく「どうしたんですか」とノダ使用文を使うのは、いつもと違う様子を見て事情をつかみたい、その人について何があったか知りたい、友達の様子・事情の全体像を把握したいという気持ちが聞き手にあるからだと考えられる。

- (13) A: (パーティーで隣に座った留学生に質問) 日本語がお上手ですね。どこで勉強したんですか?

B: 国の大学です。

(14) A: (入学試験で試験官が留学生に質問) 日本語はどこで勉強しましたか?

B: 国の大学です。

#### 4 ノダ非使用文の役割

第3章ではノダの使用と非使用文を比べ、非使用条件および非使用文の機能を提唱した。前章で考察したことを以下にまとめる。

##### ノダ非使用条件

ある情報が、聞き手の想定内にあり、聞き手が十分認識し、その情報の再認識を促す必要がない場合か(例文(7))、ある情報が聞き手の想定外であっても、その情報が聞き手の想定外であり認識してもらいたいという意図を表出しない場合(例文(4))、ノダが非使用になる。

##### ノダ非使用文の談話機能

- ①聞き手の想定および認識に関与しない、話者側の正否判断を聞き手に明示する
- ②ノダが全体像の把握を助けるための関連情報を提示するのに対し、ノダ非使用文は中核情報の正否を明確に示すものである。

ここで、本稿の目的がどのように達成されたかを述べる。本稿の目的は、ノダ非使用文の使用条件と機能を考察することにより、二つのことを明らかにするものであった。一つは、ノダ非使用文はノダの機能の表出を回避するためだけに用いられるのか、あるいはノダ非使用文に固有の機能があるのか、また二つ目に、ノダ非使用が羅列的な印象を与えるのはなぜか、まとまりを構築しないのはなぜかということである。上記にまとめたノダ非使用文の条件および機能を見るかぎり、ノダの非使用条件に関しては、新しいノダ説に共通している対人的態度「聞き手が十分認識していないことを認識させる」という機能と相反する条件がノダ非使用文にはあると言える。つまり、聞き手が十分認識しているため認識させる必要のない場合にノダが非使用になり、また、聞き手が認識していない場合、知らないことなので認識させたいという意図が話者にはない場合は使用されないということである。

一方で、本稿で得られたノダ非使用文の機能は、ノダ非使用文に固有の機能があることを示している。それは、ノダ非使用によって、聞き手の想定・認識に関与せず、話者本位の正否判断を提示するということであること、およびノダ非使用文によって中核的情報を提示するということである<sup>7</sup>。ノダが聞き手志向の情報伝達であるのに対し、ノダ非使用文は話者志向の情報伝達であるとも言える。

本稿の目的の第二番目は、何故ノダ非使用文が羅列文的な印象を与え、談話にまとまりを与えないかという理由を明らかにすることであった。上記談話機能の②がその理由

となる。ノダが、ある物事の全体像の把握を助ける関連周辺情報を提示するため、結果的にまとまりが生まれ、またノダ非使用文が中核情報を提示し、その情報だけで完結するものであるために、ひとつひとつが独立した、前後に関係付けされない文となり、結果的に羅列文的な印象を与えると本稿では考える。

最後に、これらの主張の妥当性を証明するために、趙(2008)が特に中上級話者にとって習得しにくいと指摘したノダの非使用文型を本稿の主張で説明を試みたい。趙(2008:14-15)はノダ非使用条件の中で特に正答率が低かったのは以下の四つの文型だったとしている。

(15) 非使用：発話時にはまだ既定でない事柄を表現する場合

(ぎりぎりで電車に乗り遅れて)「あー、間に合わなかった／＃間に合わなかったんだ」

(16) 非使用：情報が既に共有されている場合

(地震があったということを知り手も知っている場合)

「昨日地震が{ありましたけど／＃あったんですけど}大丈夫でしたか？」

(17) 非使用：質問文に対する答えがまだ定まっていないと捉える場合

(服を試着して)「どう？この服 {似合いますか／＃似合うんですか?}」

(18) 非使用：客観的、一方的に情報提供を求める

(税務署の申告)「確定申告はもう {すまされましたか／＃すまされたんですか?}」

まず、(15) の話者の発話は、何か他の話題について把握するために関連した情報を把握しようとしているのではなく、「電車に間に合うかどうか」という独立した命題だけを考えている切迫した状況であり、その一つの命題にのみ焦点があたっている状態である。従って、一つの独立した命題、間に合うか合わないかが中核的命題であってその正否判断を行う発話ということで、ノダは非使用となる。次に、(16) では、同じ地域で地震があったのであるから、聞き手も知っている情報であり、本稿の非使用条件で示した通り、聞き手の想定内に存在する情報にはノダは使用されず、また大きい地震であれば聞き手に再認識を促すまでもなく、非使用となる。(17) も、他の命題について把握するための関連周辺的情報として質問しているのではなく、話者が最も明確にしたいのは、「似合うか似合わないか」であり、中核情報の正否を問うていると判断でき、ノダは非使用となる。最後に (18) の例文は、上記 (13) (14) で考察したように、事務的な質問の場合は、その人物像を把握するためではなく、その情報を得るのが目的であり、それで情報伝達が完結する場合であるから、ノダ非使用となる。このように、趙(2008)が中上級学習者にとって非使用条件の理解が難しいと指摘した文型について、本稿の主張を用い新たな角度から捉え直してみた。

## 5 今後の課題

本稿ではノダ非使用文の条件と談話機能を KY コーパスを使って考察した。その結果、ノダ非使用文は、ノダの機能の表出を回避するために用いられるが、同時にノダ非使用文に特有の機能もあることが分かった。また、ノダ非使用文が羅列文的な印象を与える根拠についても述べた。

今後の課題として、ノダ非使用文の二つの機能、①聞き手の想定・認識に関わらない、話者側の正否判断を伝達する機能と、②ある話題の関連周辺情報ではなく中核的情報を伝えるという機能が、どのように関連性を持つのかについて考えたい。この二つを包括する機能については、今後の課題としたい。

## 注

- 1 KY コーパスは、面接者と話者との会話を収録したもので、ACTFL-OPI の形式に沿って行われている。面接は 15 分以内で、談話とロールプレイによって構成される。構成の詳細は、まず、面接者が被験者と初めて対面し、話に必要な個人情報を得る。大学生の被験者の場合は名前、専攻分野、将来の仕事について、社会人の被験者に対しては名前や仕事、住居などについてインタビューが行われる。また、意見や説明をする技術を引き出すことを意図して、社会的、時事的問題についてインタビューが行われる。最後に、アルバイトの面接等のロールプレイを行う。非母語話者の会話 66 名分、母語話者の会話 50 名分が収録されており、下記にて音声とスクリプトが公開されている。<http://www.env.kitakyu-u.ac.jp/corpus/>
- 2 例文の出典について、以下の順で示す。コーパス名、インタビューが行われた大学名、被験者の頭文字、被験者の性別・・・(M) は男性 (F) は女性とする。
- 3 A' の「楽しいんですよ」は非文として挙げたものではなく、可能な例として付け加えたものである。本稿では、ここで、何故ノダが使用されなかったかに注目し、非ノダの考察をすすめるものである。
- 4 坂野 (2003:230) も、ノダ非使用文を、事実を孤立的に描写したもの (isolated description of a fact) としている。
- 5 統計は国内の被験者 40 名を対象としたが、本稿で使用した例文には、海外で行ったインタビューも一例含まれている (例文 (8))。
- 6 例文 (11) A' におき、「よね」を使わなければある程度自然な文と言えるが、それでも、ノダ使用とノダ非使用を比較すると、ノダ非使用の方が一文一文を言い切っているという印象を与え、ノダ使用は聞き手に話しかけているという印象を与える。その点で、「よね」がなくても、ノダ使用と非使用時は違いが生じるものと考えられる。
- 7 ノダ自体の解釈に関し、名嶋 (2007) が、「ある命題を」「ある先行発話や思考の解釈

として」話者が先回りして聞き手に対して提示するのがノダであるとするのに対し、本稿では、ノダ非使用文の機能②が表しているように、ノダで示された情報は、聞き手が取るべき解釈そのものではなく、全体像（解釈）へたどり着くための一情報、全体把握（解釈）への方向付け、および基盤形成となる情報であると捉えている点で異なっている。

## 参考文献

- 石黒圭 (2003) 「「のだ」の中核的機能と派生的機能」『一橋大学留学生センター紀要』6, pp. 3-26.
- 市川保子 (2010) 『日本語誤用辞典』スリーエーネットワーク.
- 菊池康人 (2000) 「「のだ (んです)」の本質」『東京大学留学生センター紀要』10, pp. 25-51.
- 社団法人国際日本語普及協会 (2007) 『コミュニケーションのための日本語第2巻ワークブック - JAPANESE FOR BUSY PEOPLE II: The Workbook for the Revised 3rd Edition』講談社インターナショナル株式会社.
- 趙萍 (2008) 「中国人日本語学習者における「のだ」「のか」の習得—使用条件と非使用条件をめぐって」『日本語教育』137号, pp. 11-20.
- 田野村忠温 (1990) 『現代日本語文法 I 「のだ」の意味と用法』和泉書院.
- 寺村秀雄 (1984) 『日本語のシンタックスと意味 II』くろしお出版.
- 名嶋義直 (2007) 『ノダの意味・機能—関連性理論の観点から—』くろしお出版.
- 野田晴美 (1997) 『の (だ) の機能』くろしお出版.
- 野田晴美 (2002) 「説明のモダリティ」宮崎和人・安達太郎・野田晴美・高梨信乃 (2002) 『モダリティ』第7章 くろしお出版, pp. 230-260.
- 蓮沼昭子 (2006) 「日本語学習者の会話能力と「ノダカラ」使用の実態—KY コーパスをデータに—」日本語教育国際研究大会 (ICJLE).
- 坂野永理・大野裕・坂根庸子・品川恭子 (2003) 『初級日本語 げんき I』The Japan Times.
- 藤城浩子 (2007) 「ノダによる「強調」「やわらげ」の内実」『日本語文法』第7巻2号 くろしお出版, pp. 171-187.
- Maynard, S (1996) “*Contrastive Rhetoric: A case of nominalization in Japanese and English discourse*,” *Language Sciences*, Vol. 18, No. 3-4, pp.933-946.
- Yoshimi, D (2001) “*Explicit instruction and JFL learners’ use of interactional discourse markers*,” In K. R. Rose & G. Kasper (Eds.), *Pragmatics in Language Learning*. Cambridge University Press, pp.223-244.